The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「責任とは、他人の突然の出現である。」 : あるダイアローグの記録
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 7, p. 31-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「責任とは、他人の突然の出現である。」

――あるダイアローグの記録――

大阪大学臨床哲学研究室では、これまで何度か「ソクラティク・ダイアローグ」のワークショップ（ほとんどが一日だけの“ショート”ダイアローグ）をおこなってきた。これまで「ダイアローグ」のルールや形式、理論的意義、参加後の感想などについては、不十分ながらもまとまったものを提出してきた。しかし「ダイアローグ」そのものが具体的にどのように行われるのかについては、「書かれたもの」として提出することが極めてむずかしく、ＳＤ本場ヨーロッパでも「ダイアローグ」そのものを紹介したテクストはないこともあって、実際にダイアローグに参加する以外、それを知る方法はなかった。

そこで、ＳＤに関心をもつひとに対して実際に「ダイアローグ」がどのように進行するのかを少しでも知ってもらうために、現実に行った「ダイアローグ」を記録し、できるだけ手を加えないで紙面に紹介することにした。ただし記録の方法は、テープに録音したものを後から聞き取って書き取るのではなく、「ダイアローグ」の進行中に筆記者がリアルタイムに書き取ったため、完全な逐語録ではなく、ところどころ発言内容が不明なところもあり、記録として完全なものとは言い難い（蛇足ながら「ダイアローグを筆記する」ということは「進行役」修行の一つとしてドイツで行われている作業である）。また、記録された「ダイアローグ」は理想的なそれはなく、一日だけのショート・ダイアローグであるばかりか、最終的な結論まで至ることのなかった不完全なものである。それでもなお、参加者は概ね有意義なダイアローグを行うことができたと感じ、ダイアローグそのものを後から吟味し、今後のよりよいダイアローグを行うための材料になればという思いから、記録を公開することにした。ところどころ内容の分かりにくいところがあるが、せめてダイアローグの熱気のようなものだけでも感じ取っていただければ幸いである。

以下の「ショート・ソクラティク・ダイアローグ」は去る2000年11月18日、10時から20時まで、大阪大学文学部倫理学研究室にて行われた。テーマは「責任について」であり、事前にテーマを発表し、研究室内で参加者を募った。

進行役（ファシリテータ）：本間
記録者：馬嶋、高橋
参加者：岸田、栗田、桑原、西川、堀江、宮沢、森、吉江

第１ステージ（10:00 ～ 12:00）
《例の提示》

進行：（ダイアローグのルール説明を行う：省略）
それではこれから責任について共同で考えるために、責任というテーマを描き出す具体的な例を皆さんご自身の経験から出して下さい。どなたからでもどうぞ。

西川：私は介護職として働いていて、ケアマネージャーの資格ももっているのですが…（中略）
進行：（白板に書き取る。他の例も同様。）

〈例１〉　老健施設で働いている私が、実際に契約されていない職務（ケアマネージメント）について（他に適任者がいないという理由で）責任を負わねばならないのか？（西川）

進行：ＳＤのルールとしては、現在進行形の例はあまり適切ではなく、既に終わった経験が望ましいのですが、この場合はどうでしょうね…。　西川さんの問いは何でしょうか？
西川：問いは後回しにしてください。

堀江：僕が小学生３年生のとき、給食がキライで、「給食は全部食べろ」という学校の方針に反して「キライなものは食べない」という自分の方針を貫いた…（中略）

〈例２〉　小学校３年生のとき、給食を食べることを拒む私に対して、担任が、私が食べるまでクラス全員を教室に残らせると言った。（堀江）

〈問１〉　人はどのようにして人に責を負わせるのか。

堀江：先生が「残らせる」と言ったところがポイントです。実際はいやいや食べたが、食べるまで随分ねばりました。

栗田：私が中学生のとき、１～２年ほど合唱部の部長をしていたが、人間関係が…（中略）

〈例３〉　中学生のとき私は合唱部の部長をしていたが、部員との関係など部長としての能力の限界を感じ、退部を申し出、他の部に入部しようとしたときに、その顧問から「あなたは部長としての責任を果たしていないのではないか」と問われた。（栗田）

堀江：能力と責任の関係が問題なのでしょうか？
宮沢：部長を辞めることが責任放棄ということではないんですか？
西川：責任をとって辞めることが無責任ということでは？
進行：ちょっと待って下さい。栗田さん、「責任ということにはじめてぶちあたった」ということがポイントなのですか？
栗田：「責任」という考えもしなかったファクターが入ってきたことにとにかく驚いたんです。問いは、

〈問２〉　責任を果たすとはどういうことか。

宮沢：５、６年前のことですが…（中略）

〈例４〉　私が編集に関わった本が出版されたとき、監修者について論文の盗用問題が起こった。この件についてせめて共同執筆者全員に対する釈明を求めたが、個人的な問題であるとの理由で断られた。（宮沢）

〈問３〉個人的責任と社会的責任はどう違うのか。

〈問４〉人は責任を誰に負うのか。

岸田：去年、僕はある雑誌の編集者を辞めたのですが…（中略）

〈例５〉　私はある雑誌の編集長をしていたが、個人的動機により辞めたいと思った。当時の状況からすれば、私の辞職は雑誌にとってマイナスになるが、編集長をそのまま続けることは私の人生にとって責任を果たしているとは思えず、辞職した。（岸田）

岸田：問いとしては、人は責任を内在的に感じるのか、外在的に感じるのか…

堀江：「内在的」、「外在的」というのを具体的に言うと？

岸田：「内在的」というのは内側から倫理的に感じるということで、「外在的」というのは外側から課せられてという意味です。

進行：では、それで問いを言い換えるとどうなりますか？（問いを書き留める）

岸田：**〈問５〉　責任を感じるのは内発的なものによるのか、それとも全体的状況からなのか。**

森　：中３のときの話ですが、枚方市では地元の高校に通わせて学歴の格差をなくすという運動をしていた…（中略）

〈例６〉　私が中学生のとき進学校を志望したにもかかわらず、担任に「学歴社会に加担するのか」と言われた。（森）

〈問６〉　中学生が「学歴社会」という問題にどのように責任を負うべきなのか。

堀江：「どのような責任があるか」と「どう負うべきか」という問いは違いますよね。

森　：自分としては「どう負うべきか」ということが考えたい。

進行：他の人はどうですか？なければ他人の出した例について問いを出してもかまいませんが…

桑原：中学生の時、教室の掃除を全員でやることになっていたんです…（中略）

〈例７〉　私が掃除当番のとき私は自分の分担以上の掃除をしないことについて、教師に「おかしいじゃないか」と言われた。（桑原）

〈問７〉　自分に与えられた責任を果たすことが、責任を果たしたといえるのか。

吉江：家で洗い物をしていて生ゴミを捨てようとしたら、中からナイフが出てきた…（中略）

〈例８〉　ゴミ袋にナイフが入っていた。ナイフの使用者である妹に対して、どうしたらそのようなことが起きずに済むのかを一緒に考えようと私が言うと、「それは私の責任？」と妹に言われた。（吉江）

〈問８〉事態を追及することが、そのまま責任を負わせることになるのか。

吉江：言ったことが責任を課したんでしょうか、それとも言い方がそうなったのでしょうか？

進行：全員例を出し終わりましたが、西川さんの問いがまだですね。

西川：〈例１〉に問いを付け加えます。

〈問９〉　能力を有するならば、要請されればそれを発揮する責任があるのか。

進行：他に問いはありませんか。それならそろそろ例を絞っていきましょう。
例を選ぶにはいろいろやり方があり、票を投じることもあります。しかし多数決の場合、もし全く関心のもてない例が選ばれると、一部の人が後の議論についていけなくなり、ダイアローグに支障を来すことになります。ですからまずは、この例には自分が関心をもてる、もてないということについて他の人に説得的に述べるというのはいかがでしょうか。

西川：〈例５〉がよいと思う。責任を負うことがつらくなるときと、積極的に責任をとりたいと思うときがある。その両方を考えるのにこの例は適している。

桑原：（**〈例５〉**を出した）岸田さんに質問ですが、「内発的責任」がよくわからない。「自分の人生に対する責任」というところに言葉を足してもらえませんか。

岸田：本心にそわないまま生きることが自分にとって責任を果たすことになるのか、そのままでいいのかということです。

進行：「内発的」という言葉を変えるとしたらどうなりますか？

西川：自分に対する責任がとれなければ、他人に対して責任をとれるのか？

進行：他の人はいかがですか。

桑原：「自分に対する責任」という言葉がやはりピンとこないです。

堀江：その言葉では、**〈例５〉**にあるまた別の側面が見えなくなるのでは？（**〈問５〉**では）自分が自分または自分の仕事に対して責任をとるというコントラストははっきりしているが、ある人が他人に対して責任を負わせる、一人の人間が「責任を負わされた」と感じるとき、それはどうなのかということが考えられない。

進行：逆に言えば、**〈例５〉**では「自分に対する責任」ということが考えられるわけで、それが例を選ぶときの基準になるのではないでしょうか。

堀江：他の例は、「他人が自分に対して責任を負わせる」という点で、**〈例５〉**とは違う。

進行：「他人から負わされる責任」と「自分が（自分へ）感じる責任」という区別または基準が示されたが、それ以外にはないか。

宮沢：「自分への責任」ということで言われている内容はわかるが、それを責任という言葉で表すかどうかが問題だと思う。自分への責任とはいってもそこにはやはり「人との関係」が入ってくるのではないか。また**〈例２〉**について、責任を負う人、負わされる人以外に、責任を「課す」人がいるという点も面白い。**〈例８〉**は「責める」ということがマイナスの感情

につながるというところが面白いと思う。

堀江：人が人を責めるときの責めの手段、「学歴社会に加担する」ということで森さんは責められている。**〈例４〉**と**〈例６〉**は何をもって責められているのかの内容が他とは違い、「社会」という抽象的なことがらによって責められている。

進行：例と問いの決定の手続きをどうするのか、休み時間あけに何をするか、について「戦略的ダイアローグ」（議論の進め方についてのメタダイアローグ）を提起します。

栗田：多数決以外ではどのような方法があるんでしょうか？

堀江：パースペクティヴ（観点）を出し合い、それを選択するという方法はどうでしょう。また、自分がこの例ならクリアに議論が進められるのではないかという点も考慮に入れる方がよい。まず再開時に、一人一人どの例をやりかたいかということを理由をあげることから始めてはどうでしょう？

進行：堀江さんの案でいかがでしょうか。よければ再開後それに従って例を絞っていきましょう。

《書き出された例》

〈例１〉　老健施設で働いている私が、実際に契約されていない職務（ケアマネージメント）について（他に適任者がいないという理由で）責任を負わねばならないのか？（西川）

〈例２〉　小学校３年生のとき、給食を食べることを拒む私に対して、担任が、私が食べるまでクラス全員を教室に残らせると言った。（堀江）

〈例３〉　中学生のとき私は合唱部の部長をしていたが、部員との関係など部長としての能力の限界を感じ、退部を申し出、他の部に入部しようとしたときに、その顧問から「あなたは部長としての責任を果たしていないのではないか」と問われた。（栗田）

〈例４〉　私が編集に関わった本が出版されたとき、監修者について論文の盗用問題が起こった。この件についてせめて共同執筆者全員に対する釈明を求めたが、個人的な問題であるとの理由で断られた。（宮沢）

〈例５〉　私はある雑誌の編集長をしていたが、個人的動機により辞めたいと思った。当時の状況からすれば、私の辞職は雑誌にとってマイナスになるが、編集長をそのまま続けることは私の人生にとって責任を果たしているとは思えず、辞職した。（岸田）

〈例６〉　私が中学生のとき進学校を志望したにもかかわらず、担任に「学歴社会に加担するのか」と言われた。（森）

〈例７〉　私が掃除当番のとき私は自分の分担以上の掃除をしないことについて、教師に「おかしいじゃないか」と言われた。（桑原）

〈例８〉　ゴミ袋にナイフが入っていた。ナイフの使用者である妹に対して、どうしたらそのようなことが起きずに済むのかを一緒に考えようと、私が言うと「それは私の責任？」と言われた。（吉江）

《書き出された問い》

〈問１〉　人はどのようにして人に責を負わせるのか。
〈問２〉　責任を果たすとはどういうことか。
〈問３〉　個人的責任と社会的責任はどう違うのか。
〈問４〉　人は責任を誰に負うのか。
〈問５〉　責任を感じるのは内発的なものによるのか、それとも全体的状況からなのか。
〈問６〉　中学生が「学歴社会」という問題にどのように責任を負うべきなのか。
〈問７〉　自分に与えられた責任を果たすことが、責任を果たしたといえるのか。
〈問８〉　事態を追及することが、そのまま責任を負わせることになるのか。
〈問９〉　能力を有するならば、要請されればそれを発揮する責任があるのか。

第２ステージ　（13:00 ～ 15:00）
《例の絞り込みと選ばれた例の詳述》

進行：８つの例から、休み時間にどれを選ぶか、考えたでしょうから、選んだ例とその理由を挙げてください。

桑原：〈例８〉。責任のことを考えていなかったのに、責任の話になっちゃったのはなんでだろう、ということを考えたい。

西川：〈例５〉。責任が自分にとってつらいものか、積極的に自ら選ぶものか、他人から与えられるものか？

栗田：〈例１〉。責任と能力ということを考えたいので。

堀江：〈例２〉。誰が誰に責任を負わすかということを考えるときに、シンプルなのではないか。

進行：他の人はどうですか？

岸田：〈例３〉。責任感情はどこからくるか？

森　：〈例６〉。社会構造の問題に対する個人の責任。

一同：（黙って考える）

進行：全員一票づつ入れたあとで、また一票づつ足していきます。

吉江：〈例８〉。事態の追求がなんで責任になっちゃったのかな、という。

宮沢：〈例８〉か**〈例２〉**のどちらか。

進行：それで大分変わってきますね。多数決を採りますが、誰か一人でもリアルに感じられない、ということがあったらだめですから。

宮沢：〈例８〉。理由はうまく言えないですが、自分の例ともつながるけれど、自分の例では、自分が責めを問うた側だったので、「責任を負わすのは悪いことなのか」ということ。責任を問うと相手に嫌がられるし、友情のつもりで言ったのに怒るというのは……。

堀江：責任を負わせること自体がすでに、非難、攻撃、否定ということですか？　では問いをこうしてはいかがでしょう？（進行役白板に書き取る。）

〈問 10〉　責任を負わせる以上の否定的なものを感じさせてしまうのはなぜか。

宮沢さんに質問したいんですが、**〈例４〉**、**〈例８〉**は、相手のしたことを確かめるということをしているが、相手には、責任を負わせるという効果を含んでいるということなのでしょうか？

宮沢：うーん。

堀江：二つの例がともに、何か言ったときに相手が自分の責任ではないと拒否した。そこが問題では？

西川：相手に変化を求めた。今の自分に自信がある人は変わりたくない。

宮沢：自信があるのなら怒りはしないでしょ。責任を課されて怒るのはなぜ？

桑原：メタダイアローグを提起します。例を選ぶのに集中した方がよいのでは？

進行：このプロセスは**〈例８〉**に納得いく着地ができるための助走と理解していましたが……。

岸田： **〈例４〉**と**〈例８〉**には違いがあるのでは？**〈例８〉**は両者が望んでいないのに「責任」という言葉が出た。**〈例４〉**は、「責任」のありかを確認しようとしたのでは。

宮沢：そうではなくて、私の例は共同執筆者としての責任を果たしてほしい、具体的には説明をしてほしいということです。

桑原：責任主体になってほしい、ということですか？

宮沢：自分は盗用をしていない、でもなんでもいいからコメントをして、共同執筆者に対する責任を果たしてほしい、と。

栗田：吉江さんのは、妹さんに対する責任を果たしてほしいとは言っていないと思うんです。確認として言ったのであって。

宮沢：相手に、その人の責任だと言うことは、その人を非難していることと同じになってしまうという点で、似ているのではないでしょうか。

（このあと多数決を行い、**〈例８〉**が３票、**〈例５〉**が３票、**〈例３〉**が２票となる）

進行：それでは、**〈例３〉**を選んだ方は、**〈例８〉**と**〈例５〉**ではどちらが自分の実感をもって問える問いになりますか？

栗田：うーん。

堀江：**〈例５〉**を選ばない積極的理由を言うと、「自ら選ぶ責任」という言葉がピンとこないです。責任という言葉を議論しようとするときに曖昧な点があるような気がする。

進行：今の堀江さんの意見についてはどうですか？

岸田：〈例８〉を選ばない理由を言うと、この事例だけで責任ということが問えるのか、と思います。妹さんの解釈の問題、言葉の問題に終始してしまいそう。責任とは無関係な中で、妹さんがたまたま責任という言葉を使った例にすぎないのでは？

進行：つまり〈例８〉では“責任とは何か”ということが不確定なままになってしまうということですね…。

堀江：〈例８〉も〈例３〉も、責任ということに非難を含む過剰な感情を付け加えている。その過剰なものを考えることができる。

宮沢：確かに、実体がない、真ん中の部分がよくわからないことになりそうですが、責任という語が避けられるのはなぜか、責任を負わせてはいけないのかを問題にした方がよいのではないか、と思うんです。

進行：それは、なぜ吉江さんが責任という言葉を使わなかったのか、ということにつながるわけですか？　このままでは〈例８〉の吟味に入ってしまうので、〈例３〉を選んだ方に優先して聞きます。

栗田：すごい迷ってしまって。2つくらい自分の関心があったのかなあ。「他から来る責任」以外の責任を考えるなら〈例５〉。責任という言葉を使うことが、非難の文脈や感情にかかわってくるということを考えるのであれば〈例８〉。

進行：（栗田さんの例および関心が）〈例８〉にあてはまる、というのはちょっと違うのでは？

栗田：〈例８〉で妹さんが「私の責任？」と聞いているのは「私を責めているの？」ということと同じことなのかな、と思いました。

進行：非難の文脈が先にあって責任が出てくる（〈例８〉）のと、責任から非難が出てくる（〈例３〉）のとは違うのではないですか。

栗田：〈例８〉の場合も〈例３〉の先生の場合も、責任と非難の感情がからまっているんじゃないですか？

岸田：どちらかといえば〈例５〉ですが、「自ら選ぶ責任」という積極的な感じとは、自分の感覚はちょっと違って、もっとどん詰まりな感じで、これ以上いくと、出社拒否にもつながりかねないなという、意志的というよりも、もっと身体的な感覚だったんです。のしかかってくるものを責任と感じた。その点で自分の例（〈例５〉）より栗田さんの例を選んだんですが。

進行：むしろ〈例８〉には行かないということですね。もう一度〈例５〉と〈例８〉で再投票しますか？　それとも残っているもので限定せずに投票しますか？

吉江：言ってなかった情報なんですが、実は前日に妹と喧嘩してました……。

一同：えーっ！

進行：どの例を推すか、挙手でお願いします。

（再び多数決を行い、〈例５〉に２票、〈例８〉に１票、〈例３〉に５票となる）

進行：ここからはメタダイアローグですが、今回は例の選択と吟味に時間をかけてみました。どの例を選ぶのかによってあとの議論を大きく左右するので。3日やる場合などはこれに1日かけたりします。では問いの吟味をしましょう。もう一度、例を聞いてみるとか、問いを検討してみるなどできます。**〈例３〉**を考えるのには、どの問いがよいでしょうか？

堀江：栗田さんから**〈例３〉**をじっくり聞いて、それから問いを吟味してみては？

進行：栗田さんの例を聞く前に、問いを確認します（問いを読み上げる）。問いの変更などはありますか？

堀江：栗田さんが、初めて「責任」について考えたということを入れるのであれば、

〈問 11〉人はどういうときに「責任」という言葉を使うのか。

栗田：私はこのような問いも考えて見たいです。

〈問 12〉　責任感情はどこから来るのか。

吉江：部長の責任と、部員が練習に来ないというのは関係するんでしょうか?

栗田：当時の私はそう思いました。

進行：それは例を詳しく聞く上で聞きなおしてください。

《栗田さんの話（板書）》

中学生の時、私は歌のうまさ、ピアノの演奏能力などの点から、合唱部の部長に選ばれた。部活に対する取り組みの違いや部員と私との仲が悪くなったこともあり、部長を辞めたいと思った（部長になって１年後くらい）。私は部長としての自信を失った。顧問に相談したところ、部に残ってはどうかと言われた（そう言われて困った）。結局、部を辞めたあと（どこかの部に所属しなければならないので）茶道部に入ろうとしたところ顧問に、「運動部ではキャプテンとかは皆大変な仕事をしている。キャプテンや部長はつらくて当たり前。だからあなたが辞めるのは、部長としての責任を果たしていない。」と言われた。私は驚き「責任」という言葉に面喰らった。先生の非難の口調にも驚いた。実際私は「責任」ということを全く考えていなかった。その後、私は和紙工芸部に入った。このことは私が生きている実感として「責任」というものに出会った最初の出来事であった。

森　：部長になったのは、いつごろですか？

栗田：中１で部長になって、１年くらいやっていました。３年生が辞めて２年生がいなかったのでそのときに部長になったのです。実際に辞めたのは中３になってからです。

吉江：引き止められたときの気持ちは？

栗田：びっくりした。この人たちって、こんなにクラブに熱心だったっけって。クラブに引き止められるということを想定していなかったので困りました。

堀江：先生の言葉使い、口調はどうだったんですか？

栗田：もともとヒステリックなお方で。「運動部ではみんながんばっている。キャプテンや部長は大変な仕事をしているのよっ」って。

堀江：責任を果たしていない、と言われてどう思ったの？

栗田：びっくりしましたね。自分のやっていることが、責任ということで計られることに。自分としては、クラブに居続けることより、事態の打破とか変化を求めていたので、責任という言葉が出てきたときに面喰らった。

堀江：ということは、責任という言葉と同時に非難ということも突きつけられたということにびっくりした、ということですね。

栗田：はい。もし、責任ということを考えていたら、別の対応をしたかもしれないですが。

宮沢：先生は、だからどうと言いたかったんでしょう？

栗田：その先生は、続けられないものか？と言いたかったようですね。だから茶道部では受け付けないと言ったんだと。

宮沢：それは責任を果たしていないという非難だけではなく、合唱部で部長を続けるという責任のとり方もある、と言いたかったんですか？

栗田：辞めるなんていう決断をするなんて、とんでもないぞ、っていう雰囲気だった。

進行：他に話を聞いてわからない点はありますか？　問いを考えるためのコアとなるステイトメントは？　栗田さんはどこがコアだと思いますか？

栗田：２点あります。（第１点は）仲が悪くなって自信を失うところと、（第２点は）責任という言葉に面喰らったところ。（進行役、該当個所に下線を引く。）

堀江：（第２点の）面喰らった、についてもっと聞きたいです。その後「責任」について考えたりしたんですか？

栗田：責任という言葉が自分の人生に実感をもって登場した最初の機会だったのかも。感じたのではなくて。

吉江：この先生は栗田さんに責任をかぶせる位置にはいないのではないですか？

栗田：その先生は、自分を茶道部に入れるか入れないかの判断をするだけでよいはずだから、教育的指導をしておこうくらいの欲求はあったかもしれないですね。

森　：部員をまとめる「責任」が果たせなくて辞めたわけではないんですね。

栗田：そういうふうには、考えていなかった。部員をまとめることが、できない、ということだったんです。

堀江：でも、部長として何かしなければいけないということは思っていたんでしょう？

栗田：はい。

進行：それをステイトメントとして付け加えましょう。（板書の書き足す。）

私自身「責任」という言葉では考えてはいなかったけれども、部員とうまくやっていくことを含めて、部をまとめていく必要を感じていたが、それは自分には無理だと思った（部員も来なくなった）。

進行：（第１点目の）「私は部長としての自信を失った」という部分をもう少し展開するとどうなりますか？

栗田：ステイトメントにある部分の「責任という言葉では考えていなかったけど、部長として部員と仲良くやっていく、ということを含めて、部をまとめるという必要を感じていた」というところですが、自分には無理だと感じたんです。同じ頃、部員も部に出てこなくなっていたし。一気にというわけではないが、徐々にうまくいかないという感じが現われてきた。この「できない、続けられない」、「能力がない」という感情と「責任」という言葉をどうつなげたらいいか、うまくつながらなかった。

岸田：能力というのは、何かを想定して言っているんですか？　部長の果たすべき「責任」とは思わなくても、ありうべき「能力」ということは思っていた？

栗田：人間関係の能力だと思う。

進行：それをステイトメントにしましょう。（さらに書き足す。）

茶道部の先生に言われた「責任」という言葉と、私がその時感じていた「できない」「続けられない」という感じとが、うまくつなげることができなかった。

宮沢：できないと思ったときに、「部長として」できないと思ったんですか？

栗田：一緒に合唱することができない以上、部長以前に、部員としていることさえ難しくなってきたんです。私とそれ以外の部員というふうに割れていたし。結局、部長として仕切ることもできていない。もしかしたら、部長であり続けることに限界を感じていたのかも。

宮沢：コミュニケーションが成り立たない、栗田さんが部長としてやろうとしても、そもそもできないということは、栗田さんの問題ではないのでは？

栗田：冷静に考えればそうかもしれないですが、私が辞めることで自分も楽になるし、みんなとの関係もよくなるのではないかという思いがあった。当時はとにかく事態を打開したかったんです。

堀江：自分は続けていけない、辞めようと思ったときに、何か葛藤なり、別の手段を探すなり、そういうためらいはなかったんですか？

栗田：むしろ、辞めるという選択肢が出るまでが長かったですね。辞めようと決めた途端、すぐに先生に言った。引き止められるということを予想していなかったです。クラブのみんなも先生も、それほどやる気ではなさそうだったから。

堀江：自分が部長として留まらなければならない、という思いは？

栗田：部長というより、歌うことを続けたいという思いの方があったんです。

進行：そろそろ問いを絞る作業に入りたいのですが……。

宮沢：辞めようと思ったことに何かキッカケはあったんですか？

栗田：結構、不登校系の話に近づいているような気もするんですけど、きっかけは、身体の感じからというか、みんなが全然来ないということがあって、そのときすごーく寂しくなって

しまって、体の力が抜けちゃったというか。みんなが来るには来るけど、すぐに帰ってしまったこともあって。キッカケとしたら、それくらいかなあ……。

第３ステージ　(15:30 ～ 17:00)
《問いを一つに絞る》

進行：栗田さんの事例に対する「問い」を一つに絞りましょう。どの問いがぴったりくるでしょうか？　まったく新しくしてもかまいません。

吉江：〈問 13〉　栗田さんは責任ということを能力という形で考えていたのではないか？

進行：栗田さんはどうですか？

栗田：答えようがない。部をまとめる必要があるのではないかということは感じた。部長の義務というよりも、 友達と仲良くできるというような場をつくっていきたいという欲求（必要）はあった。

宮沢：責任という言葉は知らなくても、それに対応するものを掴んでいたのでは、という意味なのだろう。

堀江：〈問 14〉　人は責任という言葉を使うとき（人が人に対して責を負わすとき）何を切り落としているのか？

栗田さんが「責任」という言葉で面食らったことなど考察できるのでは？

進行：〈問 11〉の発展形ですね。

堀江：はい。

進行：すでにで出た問いのリフォームでもいいですが。

宮沢：〈問 15〉　人は一人で責任が果たせるのか？

部員が来ないということで責任が果たせる / 果たせないの問題ではなくなっている。

進行：一人で、とはどういうことか？

宮沢：責任を負う相手がいないと果たせない、という。一人というのは受け手のないところで、という意味です。

岸田：物理的に一人というが、部員がいる以上組織は成り立っているはず。それを一人といってしまっていいのか？

栗田：むしろ音楽室に一人しかいないということをどうとらえるか、という問題でしょうか。そのときの部の状態を私は「私がいなくても成り立つ部」ととらえていたように思います。あるいは私がコミットしようとすると（部は）そこにはなかった、というか……。

森　：部員たちが「あなたは責任を果たせ」といわないところで責任は発生するか？

宮沢：先生は部長としての責任というが、部員たちの責任はどうなるのか？

進行：他に問いは？

西川：責任を果たしていない、といわれて栗田さんはどう思ったか？

栗田：私の責任であるとも、責任でないともいえない、その言葉だけが残ってしまって……「責任」という言葉への距離があるままになってしまった。逆にある意味現在進行形というか、私が経験した事柄と責任とがつなげられるものならつなげてみたい、という感じをもっています。

進行：いまでも（この事例における）自分の責任の範囲がよくわからない？

栗田：責任ということに対して、責任とその非難の口調を分けて考えてみたい。（そのことで）責任ということをポジティブに考えられるのかな、というふうに思います。

西川：僕が確認したかったのは栗田さんが自分に責任があると思ったのかどうか。栗田さんが責任ということを考えもしなかったのなら、この事例では責任ということについて考えにくいのではないですか？

堀江：栗田さんは自分の責任だと考えられなかった、というのが例で、その例にあわせて問いを立てなければならない。だから**〈問 14〉**がよい。

桑原：<u>**〈問 14〉**</u>では責任の周辺については考えられても、責任そのものについては考えられないのではということで納得いかなかったのですが、いまの堀江さんの説明で納得したので、（問いを一つに絞るとしたら）**〈問 14〉**でいいです。

進行：桑原さんはどういうふうに納得したわけですか？

桑原：この事例に関しては、責任そのものではなく、責任というときに逃れていくもの、という問いの立て方がよいのではないか、ということです。他の問いとはちがうけれど、**〈問14〉**のような問いのほうがいいのではないかと思いました。

岸田：（いままでの話や**〈問 14〉**は）「内発的」責任ということにこだわりすぎているのではないか？「全体的」責任ということでいえば責任について取り扱える。

桑原：茶道部の先生は無責任とかいえるかもしれないけど、そうではなく栗田さんの「責任」ということでしか切り出せない。

岸田：責任は状況を設定しなければ語れないでしょ？

桑原：栗田さんは「責任」という言葉で括られるといつまでも違和感が残ってしまうわけで……。

西川：自分は思っていないけれど、周りからそういわれることの意味、ということを話してもいいわけで……。問いにすると、

〈問 16〉　お互いの了解がないところで責任がなりたつのか？　責任主体に了解がなくても責任がなりたつのかどうか？

栗田：逆に責任感を感じるのはどういうことか、という問いも成り立ちますね。**〈問２〉**であれば、私の行為は責任を果たしたのか、という問いになるのだが、自分の問いとしては責任という感情（**〈問 12〉**）を考えたい。

進行：責任を感じるということ（**〈問 12〉**）と**〈問 14〉**とリンクするところはありますか？

栗田：責任という言葉を使うときにはある前提がある気がする。前提を持っているために見えな

くなるものがあるのではないか、というふうに**〈問 14〉**は理解した。**〈問 12〉**はその前提を問題にできる気がして自分の中ではつながっている。

堀江：「責任感情」というのがこの例のなかでどう位置づけられるのか？栗田さんにはその感情がなかったわけだから・・むしろ「責任」という言葉を与えられて何か感じるというときのことか？

栗田：（たしかに事例には即していない）自分が感じたことがなかったから、責任を感じるとはどういうことかというのを知りたかった。

宮沢：「責任」という観念にびっくりしたのではなく、「責任を果たしていない」というディスクールにおどろいたのでは？先生が「責任を果たせなかったね」といえば、栗田さんのうまくやっていけなかった、という思いにはぴったりあったのでは？

栗田：自分としては「やれることはやったな」という思いで、責任を果たすということはそれ以上のなにかがあるのかな、と思っていた。だから、

〈問 17〉「やれることはやった」と「責任を果たす」とでは後者の方が前者以上のものを含んでいるのか？

宮沢さんの問いにたいしては、驚いたのは確かです。非難の口調のほうに収斂していく。「根気がないわね」とかのほうがぴったりきたような気がする。「責任」ということをいわれておどろいた。継続性とかいうことを言わないであえて責任ということを言い出したことにびっくりした。

進行：先生の言う「責任」というのは「部に残ること」だった。その考え方に当惑したのか？

栗田：部に残るということが「責任」だろうとも思ったが、それは自分にはできないと思った。

堀江：「部長を続けるべきだ」といわれたら、「それはもうできない」と答えられたはず。それを「責任」という言葉でなにかをあきらかにせずに……。

栗田：確かにひとつちがうレベルに話が持っていかれた気がした。

進行：しかし日本的文脈においてはそういう「責任」の遣い方はイレギュラーではない。

堀江：そうだとしたら「責任」という言葉を使うことで、具体的な行為をせよ、ということを切り落としているのではないか。**〈問 14〉**の答えじみたものですが。そろそろ問いの検討、絞りに入りませんか。

進行：〈問 14〉の中にもまだ解釈の余地があって、それでみなさん議論の余地があると思われるのではないか？

（もう一度問いの検討のために「問い」をすべて読みあげる）

宮沢：〈問 14〉の場合は、先生のほうに問いが収斂していくことになりはしないか？

堀江：〈問 14〉は栗田さんのとまどいをとりだせるはずだと思います。

宮沢：先生としては「部長を続けなさい」ということでよかったはずなのに、「責任を果たしてない」といったのはなぜか、ということですか？

堀江：それだけでなくもっと広く……。

岸田：切り落とすとはどういうニュアンスですか？

堀江：栗田さんの事情を先生が切り落とした、という意味です。

進行：とりあえず**〈問 14〉**周辺が皆の関心事項ということでいいですか？

栗田：〈問 15〉も気になるんですけど……。自分自身が誰かに呼応して責任を受けてもらうということを考えたことがなくって、それを考えたいという部分もあるわけで。

進行：事例がよくみえるために、ということを考えればいいのですが……。

宮沢：「具体的な状況」が切り落とされるもののなかに入ってくるのではないか

進行：切り落とすという表現を工夫するとしたらどうなりますか？**〈問 14〉**は「何を」ということに焦点をあてて問うているのですが、それでいいですか？

桑原：〈問 15〉をもう一度事例にそくして説明してもらえませんか？

宮沢：栗田さんが一生懸命やろうと思ったことは責任の表れだと思う。教室に一人もいなくなったときに、もはや栗田さんの責任ということをこえる事態が起こってしまっているんではないか、ということです。

吉江：責任は受け手の存在によって成り立つものかどうか、という問いもありうる

宮沢：そうではないだろう。責任は誰かに対して負うものなのではないか、という……。

進行：宮沢さんの問いは、責任とはこういうものだ、という前提がある問いですね。

堀江：そうでもない。責任という言葉の使用は、前提ごと相手に投げつけている、ということもいえる。

宮沢：堀江さんの問いには、負う、負われるの上にもうひとつ「課す」ということが入ってきているような気がする。

岸田：僕は「切り落とす」ではなく「盛り込む」ではないかと思う。栗田さんは自分の能力を問題にしていたのに、先生が「責任」ということを使うときにはなにかプラスアルファをしている。（**〈問 14〉**を**〈問 14 α〉**にするとともに、次の問いを追加する。）

〈問 14 β〉　人は「責任」という言葉を使うとき、何を付け加えているのか？

堀江：できるできないに何かをつけ加える、と考えるのか、「責任」という言葉によってできるできない諸々のことを含めて「責任をとるのかとらないのか」と形式的に問うことによって切り落としている、と考えるのか、どっちの観点をとるのか。

進行：問いが曖昧なのではないでしょうか。これで答えが出やすいかどうか……。

堀江：新しい問いを立てたいと思います。

〈問 14 γ〉　人は「責任」という言葉を使うとき、状況の何を変えるのか？

宮沢：何を変えるのか、ではなくて何を変えたいのか？では？

進行：堀江さんの新しい問いでは何が見えてくることになりますか？

堀江：盛り込む、切り落とすを含めて考えようとしたのですが。

進行：「何を切り落とすか」、「何を無視するか」という表現なら、問いに対してどう答えを出すかが限定されてきますが、「状況を変える」というと、また別の抽象性に飛びますね……。
では次の時間では**〈問 14 α〉**、**〈問 15〉**あたりから出発してよろしいでしょうか。

《追加された問い》

〈問 10〉　責任を負わせることが、それ以上に何か否定的なものを相手に感じさせてしまうのは何故か。
〈問 11〉　人はどういう時に「責任」という言葉を使うのか。
〈問 12〉　責任感情はどこから来るのか。
〈問 13〉　栗田さんは、責任ということを“必要”という観点で捉えていたのではないか。
〈問 14 α〉　人は「責任」という言葉を使うとき（人が人に責を負わすとき）、何を切り落としているのか。
〈問 14 β〉　人は「責任」という言葉を使うとき、何を付け加えているのか。
〈問 14 γ〉　人は「責任」という言葉を使うとき、情況の何を変えるのか。
〈問 14 δ〉　人は「責任」という言葉を使うとき、何を無視しているのか。（第４ステージ参照）
〈問 15〉　人は受け手のないところで、責任を果たすことができるのか。
〈問 16〉　責任を課す人と課される人の間で了解がないところで、責任を問いうるのか。
〈問 17〉　「やれることはやった」と「責任を果たす」とでは、後者の方が前者以上のものを含んでいるのか。
〈問 18〉　行為が不可能だと分かっているにもかかわらず、さらに責任を果たせと言えるのか。（第４ステージ参照）
〈問 19〉　責任は行為（やることはやった）にあるのか存在（合唱部に居つづけること）にあるのか。（第４ステージ参照）

第４ステージ（17:30 ～ 19:00）
《答えを出す》

進行：そろそろ問いを一つに絞るとともに、ステイトメントを出していきましょう。いつまでやるかは皆さん次第ですが、できれば「答え」を出すところまでいきたいと思います。

栗田：問いは**〈問 14 α〉**と**〈問 15〉**ですよね。

堀江：〈問 14 α〉を次のような問いに変えて、答えで盛り込めないかなと思うのですが。

〈問 14 δ〉　人は「責任」という言葉を使うとき、何を無視しているのか。

進行：今の堀江さんの言うとおり**〈問 14 α〉**を変えた場合に皆さんは答えられますか。

西川：「切り落とす」という場合「何から」ということがあるでしょう。本来あるべきものから何かを切り落とすということですか。

堀江：「本来あるべき」ということを僕はあまり考えていなかったのですが、例えば栗田さんは部を辞めるときにいろいろ事情があったわけだけれど、その一連の行動に「責任を負わす」という場合、そういう事情が無視されてしまっている。

西川：部長は「つらくて当たり前」と言われたら抗弁のしようがない、というわけですね。

堀江：「当たり前」も切り落としの一つですよね。

西川：「責任」という言葉が使われる場合、責任という原理原則を受け入れるのが「当たり前」だということも含まれているでしょうが、必ず「当たり前」というのが入っているんでしょうか。「当たり前」だという言葉は相手を無責任だと非難するときには使うけれど、相手に責任感情を呼び起こそうとしているようには思えない。つまり責を課しているとは思えない。「責任の取り方はどうするか」という前向きのものを示そうとする部分は、この例の中にはないように思える。

吉江：指導的というよりは懲罰的ということですね。

進行：しかし**〈問 14 α〉**では、責任という言葉を使う人の「意図」は問題にはなっていない。

西川：責任を課して自尊心を育てるという場合と、責任を果たしていないといって切り落とすという場合と、「責を負わす」といっても二つの場合がある気がする。

岸田：責任を課すというとき、相手が責任を感じるようにするということとは違うのではないか。

吉江：「責任という言葉を使う」と「相手が責任を感じる」ということの違いですね。

堀江：僕は同じだと考えている。

進行：つまり「何を変えるのか」ということに関しては違いがないということですね。

岸田：しかし、課す人間と課される人間とのコミュニケーションが問題になっていない。

堀江：そう、問題になっていない。栗田さんは「責任」という言葉を理解しても、それ以上のことは分からない。僕はその言葉の使用のレベルを問題にしているのです。

栗田：「部を続けなさい」ということではなくて「責任を果たしなさい」と言ったほうが、何か状況を変えるのではと思った……ということでしょうか。

西川：〈問 14 α〉は、「それはあなたの責任です」と言ったとき私が何を切り落としている、と言い換えていいのではないか。責任という言葉を用いる側の問題として見ることもできるのではないか。

堀江：いやむしろ「何が切り落とされているのか」と考えたほうがいい。例えば、二人の間で何かが切り落とされていると考えたほうが……。

進行：メタダイアローグを提起します。「責任」ということの前提が違うのではないでしょうか。その前提が見えるような形で問いが立てられるようにして下さい。少なくとも「責任」という言葉を使うということは、異論がないようなので、そこからその前提が見えるように考えてはどうでしょうか。

吉江：責任を負わせると先生が言ったのに栗田さんは納得していない。それでは責任を負うことにはならない。

堀江：例の中で栗田さんは責任を引き受けていない。従って、栗田さんはどのように責任をとるのか分からない。

吉江：「責任」という言葉が分かれば責任をとれる、ということにはならない。

栗田：「責任」ということが分かっても「自分の責任ではない」ということもできるわけで、この例では、それ以前にとどまっている。受け入れることも跳ね返すこともできない。

進行：なるべくニュートラルな問いにして、「答え」で前提の差異が明らかになるほうがいいですね。**〈問 14 α〉**の前提はいいわけですから、その後をなるべくニュートラルになるようにまとめてはどうでしょうか。

堀江：〈問 17〉に着目して「ある行動が単に行動であることと責任を果たすことの違いは何処にあるのか」という問いを立てたい。

岸田：「やれることはやった」（栗田）と「責任を果たす」（先生）とのギャップがある。

栗田：そこが埋められるということは、自分の中で「やれることはやった」が「責任を果たした／果たせなかった」と言えることですね。

堀江：ある行動とそれが責任を果たすということの違いは何でしょうか。**〈問 14 α〉**が煮つまっているようなので、問いを別の形にしてみたいのですが。

********　少し休憩　*********

進行：問いをどう理解するか、という議論は不毛なので、答えを出すという労力にもっていきたい。**〈問 14 α〉**に対して堀江さんならどう答えますか。

堀江：大まかに言えば、

〈答 1〉　栗田さんの置かれた様々な情況が切り落とされている。

進行：〈問 15〉はどうですか、宮沢さん。

宮沢：「できない」のではないか、と答えます。

進行：できれば一人一人、問いに対する答えを言って下さい。**〈問 14 α〉**に対して「責任」という言葉が使われるとき、必ず何かが切り落とされるはずだ、という前提があるわけで、それが理解されているなら、あれが切り落とされたとかこれが・・・と言えるわけですよね。

岸田：自分としては**〈問 14 γ〉**のほうが分かりやすい。

進行：だとしたら答えは？

岸田：〈答2〉　**栗田さんの個人的な経験から部長の責任という一般形式の問題へと位相が移った。**

森　：文脈に即しているがどうかは分からないが、

〈問18〉　行為が不可能と分かっているにもかかわらず、さらに責任を果たせと言えるのか。

進行：答えは？

森　：……

吉江：それでも不可能でないと言われることがあるのではないでしょうか。

進行：それは栗田さんの状況に関する問いなのでしょうか。顧問の発言の当否は問うことができるでしょうが、栗田さんが答えられなかったことは、問題にできませんよね。

宮沢：〈問 19〉　責任は行為（やることはやった）にあるのか存在（合唱部に居つづけること）にあるのか。

予想される答えは「人によりけり」です。

一同：（笑）

西川：〈問 16〉に答えます。了解のないところで責任を問いえない。尊重する価値に対する同意がないと「責任」ということができない。「メンバーシップに支えられていないところで部長としてはいられない」という栗田さんの気持ちと、先生の「メンバーシップがなくても部長としてやっていくべきだ」ということがすれ違っている。先生は一方的に価値を押しつけているだけだ。

進行：〈問 16〉を**〈問 14 α〉**流に言い換えると、責任というときにある価値観への合意を求めているということになるのでしょうか。

西川：そうだと思う。

進行：「価値」とは何でしょう。どういう価値への合意を求めているのでしょうか。

堀江：先生が部長の「責任」ということであるイメージを抱いている。先生は栗田さんにその価値観を投げかけた。

西川：合意がなければだめだ。

森　：それでは責任論の一派の主張でしかない。つまりそれでは「この先生はその（合意を前提にするという）論には従っていない」ということしか言えていない。

西川：責任ということで、その人の自尊心につながる責任ということがあると思うのです。そうでなかったら単なる押しつけになってしまう。栗田さんの例は合意ではなく単なる押しつけだ。

〈答3〉　責任を問うためには価値への合意が必要である。合意がなければ責任は全て外圧的なものとなってしまう。

吉江：〈問 14 α〉への答えです。栗田さんは責任という土俵に引きずり込まれてしまった。勝手にルールを書き換えられてしまった。

桑原：それは、一旦「責任」という文脈に入れられると、全て「責任」という文脈で言われてしまって、栗田さんがどんなに「部員が来なくて」とか言っても「責任」の文脈でしかもの

が語られなくなってしまう、ということですね。

〈答4〉　一度責任という言葉が持ち出されると、責任という文脈以外で自分の経験を語り得ない。

堀江：〈答 5〉　様々な状況を語りうる可能性が切り落とされている。

西川：切り落とされてるというか、あたかも合意があったかのように話が進められてしまう、ということではないでしょうか。

〈答 6〉本来確認すべき価値への合意がなされていなくとも、それがあったかのような文脈に相手を追い込む。

宮沢：〈問 14 α〉への答えです。

〈答 7〉　当事者の気持ちが切り落とされることによって、責任関係が（積極的な意味で）明確になることもあれば、（消極的な意味で）個人的な気持ちが見えなくなることもある。

進行：前提の違いが明らかになるようなメモ書きを当面の目標にしたいと思います。

桑原：吉江さんの答えをパラフレーズしましたが、責任という言葉で語ったら他の語り方はない、ということを言っても仕方がないような気がする。それで終わってしまう気がする。

進行：例えば宮沢さんの「答え」に対してはどうですか。

桑原：自分のイメージする「答え」と裏返しの関係にあると思う。

宮沢：栗田さんの例には、権力構造が入ってきていて、「自由じゃない」と言えなくなってしまっている。

桑原：僕は、権力構造があろうがなかろうが一旦「責任」ということを言ってしまうと、その文脈以外では語ることができなくなる、ということを考えたのです。でもそれにとどまらず、「責任」ということで答えをまとめるときに、何か次につながる一歩ということを考えたい。

堀江：「次につながる」の意味が不明瞭だ。栗田さんの例に関して「次につながる」ということですか。

栗田：〈答 7〉の変形ですが、当事者（私）以外の（部員や合唱部の先生の）思惑が見えてきた。

堀江：「見えてきた」というのはどういうことですか。

栗田：自分の実感としての「やるべきことはやった」を超えたところで、部員とかのことが入り込んでくる。例えば自分の実感がちゃんと他人に伝わっていたのかとか。他者の（自分への）行為の期待ということを抜かして考えていたなと思う。引き留められたときにびっくりした、ということも思い出す。

〈答 8〉　責任という言葉が導入されることによって、「やるべきことはやった」という当人の見方だけでなく、当人以外の人たち（顧問や他の部員）からの行為期待（どういう行為が期待されるのか）に気づくことができる。

森　：当事者の気持ちというのがピンとこない。**〈問 18〉**から離れられない。責任を行為で考えてしまう。行為が終了した後で、部長としての行為の責任を問われた。栗田さんの行為が

終了したという認識が切り落とされてしまっている。

〈答9〉 栗田さんの中でするべき行為が全て終わってしまったという認識があったにもかかわらず、それが無視されている。

進行：締めくくりとして「責任とは何か」に答えて下さい。一人ずつ。

堀江：責任とは、何かを切り落とし何かをすくい上げることである。

岸田：責任とは、個人の抽象化である。自分のこれから考えるべき課題として、抽象化と社会性の関連が浮上した。

西川：責任とは、合意の下で分かち合うべき価値への指向である。

吉江：責任とは、ある拘束力の強いルールに支配されたゲームである。

宮沢：責任とは、行為の輪郭を決めるものである。

栗田：責任とは、他人の突然の出現である。

森　：責任とは、さらに行為が可能である時にのみ問われうるものである。ただし、そのように当事者が認識している場合に限る。

桑原：責任とは、ときとしてコミュニケーションを遮断するものである。

《出された答え》

〈答１〉 栗田さんの置かれた様々な情況が切り落とされている。

〈答２〉 栗田さんの個人的な経験から部長の責任という一般形式の問題へと位相が移った。

〈答３〉 責任を問うためには価値への合意が必要である。合意がなければ責任は全て外圧的なものとなってしまう。

〈答４〉 一度責任という言葉が持ち出されると、責任という文脈以外で自分の経験を語り得ない。

〈答５〉 様々な状況を語りうる可能性が切り落とされている。

〈答6〉 本来認識すべき価値への合意がなされなくていなくとも、それがあったかのような文脈に開いてを追い込む。

〈答７〉 当事者の気持ちが切り落とされることによって、責任関係が（積極的な意味で）明確になることもあれば、（消極的な意味で）個人的な気持ちが見えなくなることもある。

〈答８〉 責任という言葉が導入されることによって、「やるべきことはやった」という当人の見方だけでなく、当人以外の人たち（顧問や他の部員）からの行為期待（どういう行為が期待されるのか）に気づくことができる。

〈答9〉 栗田さんの中でするべき行為が全て終わってしまったという認識があったにもかかわらず、それが無視されている。